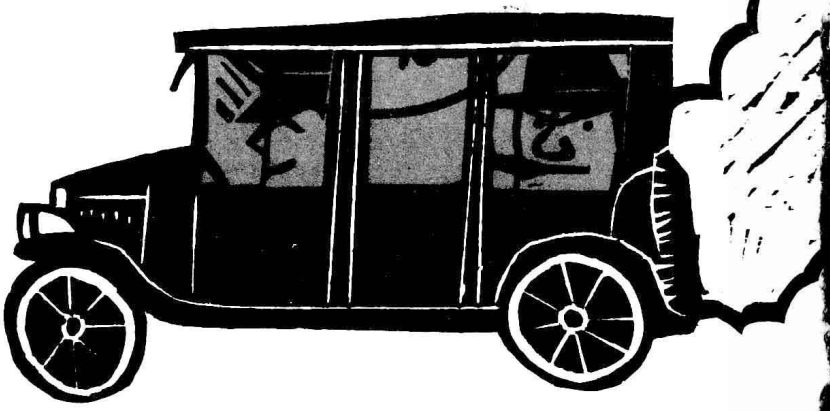
スケッチ傑作展〔2〕

浅倉久志編・訳



早川書房

検印廃止

ユーモア・スケッチ傑作展 [2]

昭和五十五年九月十日 印刷
昭和五十五年九月十五日 発行

定価 一三〇〇円

著者 ベンチリー・他
編・訳 浅倉久志
発行者 早川清
発行所 株式会社 早川書房
郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話 東京 (二五二) 三一五一 (代)
振替番号 東京 六-四七九九 番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・信毎書籍印刷株式会社 製本・株式会社明光社

ユーモア・スケッチ傑作展〔2〕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人間の歴史において、ある一国民が、それまで他国民と結びつけられていた政治的束縛を解消し、自然の法と造化の神より与えられた自立平等の地位を、世界列強の間に占めることが必要となったとき、全人類の意見に対する適切な敬意からしても、その分離を余儀なくされた理由を声明すべきことは当然である。

われわれは、以下の真理を自明のものと信ずる――すべての人は平等に創られ、造物主によって、一定の奪いがたい権利を賦与されている。その中には、生命と、自由と、幸福追求の権利が含まれている。これらの権利を確保するため、政府が人類のあいだに組織されるが、その正当な権力は被治者の同意に由来する。いかなる政治形態といえども、これらの目的に対して有害となった場合には、人民はそれを改変あるいは廃棄し、最もよく人民の安全と幸福を実現すると思われるような、そうした原則に基礎を置き、そうした形態でその権力を組織した、新しい政府を樹立する権利がある。

たしかに、慎重な思慮の命ずるところからすれば、長く存続した政府を、軽々しい、一時的な理由で改変すべきではないであろう。したがって、過去の経験もすべて、人類が年来慣れ親しんできた形式を廃止して自己を是正するよりは、むしろ、害悪に耐えられるかぎり、それに耐えようとする傾向を示している。しかし、つねにおなじ目的を追求した、長期にわたる暴虐と収奪が、人民を絶対的圧制のもとに屈服させんとする意図を明示した場合、その政府を打倒し、自己の未来の保全のために、新しい保障組織を創設することは、人民の権利であり、義務である。これら植民地の隠忍自重はまさにその実例であり、植民地人民がいまや従前の政治形態を改革せざるを得なくなった必要も、またここに存する。大英帝国の現国王の歴史は、これら諸州の上に絶対的専政を確立することを直接の目的とした、うちつづく権利侵害と収奪の歴史である。これを証するため、公正な世界に、あえて事実を提示したい。

一九二一年八月二四日

ロバート・ベンチリー

（――『オブ・オール・シングズ』の序文より）

作品目録

第一室

透明人間の手記　コーリイ・フォード　11
ひとりものの朝食考　フランク・サリヴァン　17
わたしはこうして亭主関白になった　アート・バックウォルド　23
スケート再訪　ロバート・ベンチリー　31
人生の鍵　E・B・ホワイト　35
もし男が女のようにポーカーをしたら　ジョージ・S・コーフマン　43

第二室

紋切型博士、恋を語る　フランク・サリヴァン　57

紋切型博士、バカンスを語る　フランク・サリヴァン　66
エンサイクロペディア国の恋　ロバート・ベンチリー　74
J・D・サリンジャーとは何者？　H・アレン・スミス　80
ペリクレス　ウィル・カッピー　88
カッピーの動物百科　ウィル・カッピー　99

第三室

実用新案　観光日記　アート・バックウォルド　117
よろずひきうけます　アート・バックウォルド　121
「あの人に聞けば？」　ロバート・ベンチリー　125
鈍行列車　フランク・サリヴァン　129
約束なんて　アート・バックウォルド　134
腰抜けコンゴへ行く　アート・バックウォルド　138

第四室

架空会見記　スティーヴン・リーコック　153
どこかでハジキが……　S・J・ペレルマン　167
チャイナタウン大乱戦　S・J・ペレルマン　175
Q――ある怪奇心霊実話　スティーヴン・リーコック　183

第五室

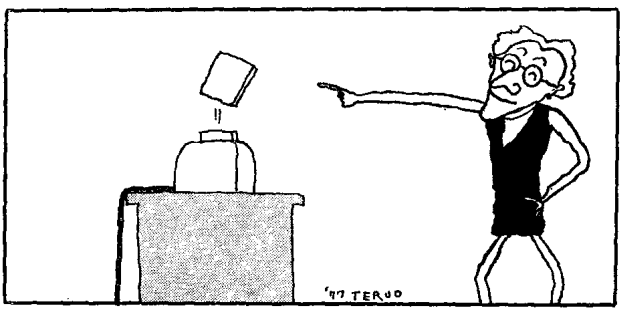
博物館にて　ロバート・ベンチリー　201
家の中の他人　ロバート・ベンチリー　208
イーディサとクリスマスの泥棒　ロバート・ベンチリー　213
死者の街　E・B・ホワイト　218
お邪魔します　アート・バックウォルド　223
ある隣人に宛てて　フランク・サリヴァン　228

第六室（イギリス作家特別展示）

十二人の赤ひげの小びと　J・B・モートン　239
御愛用者各位　ポール・ジェニングズ　261
書斎に死体が……　J・B・モートン　266
英国人入門　ジョージ・ミケシュ　283
作家紹介　299
展示作品原題　305
ごあいさつ　307

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一室



透明人間の手記

コーリイ・フォード

ひょっとすると、わたしは透明人間になりかけているのではあるまいか。

わたしにはレストランの給仕たちの姿が見えるのに、むこうにはこっちが見えない。駅の出札口の係員の視線は、こっちの顔を素通りして、つぎに並んだお客の上におちる。デパートの女店員や、駅の赤帽や、タクシーの運転手の注意をひこうとするときにも、やはりそれと似たような感覚におそわれる。

といって、自分の姿を鏡に映してみたところでは、かなり実体があるように見えるのだ。部分的には、ちょっぴり実体がありすぎる感じがしないでもない。とくに横向きになって鏡をのぞいた場合がそうだ。

まあ、そんなことはよろしい。とにかくそのわたしが、この上もなく堂々たる態度でレストランへ乗りこむとする。あごをぐいと突き出し、やおらネクタイをしごいて結び目をととのえ、自信たっぷ

りな仕草で給仕頭に合図を送る。給仕頭の視線はこっちへ動いてから、わたしの右頬骨の真中あたりを貫通し、頭蓋骨の後ろへ出て、わたしのすぐ背後にある花模様の壁紙の一点に静止する。そしてしばらく壁紙を見つめてから、あいまいに肩をすくめ、そっぽを向いてしまう。

それから五分のち、ようやくわたしは彼の目をひくことに成功する。給仕頭はこっちへつかつかと近づき、わたしの真横に積んである山からメニューを一部ひきぬいて、部屋の奥へともどってゆく。さらに十分がたつ。そのあいだ、入口に突っ立ったわたしは、彼がそばを通りかかるたびに自分を指さし、痴呆のようにニヤニヤするだけだ。ようやく両者の目はまともにぶつかりあう。むこうは遅まきにはっと気づいた表情になり、急ぎ足にこっちへ近づいてから、申し訳なさそうに両手をもみ合わせ、そしてわたしのすぐ後ろにいる夫婦連れに、「どうぞこちらへ」と声をかける。わたしがたまたま鏡をのぞき、自分の姿が見えないのにびっくり仰天するのは、たいていこの頃だ。そこであわててあたりをきょろきょろ探しまわってから、しまいにはレストランの前の歩道に立って、わたしが出てくるのを待つことになる。

かりに食事にありつけたとしても、そのあとで勘定書を請求するときのわたしは、またいっそう目につきにくいらしい。どういうわけかわたしの係の給仕は、いつもその瞬間を狙っていたようにして、食堂のむこうの隅でチェーフィング・ディッシュのまわりに固まっている給仕たちの仲間入りをするのだ。わたしがいる一角は、真冬の海水浴場のようにがらあき。薄暗がりの中を透かして、わたしはおずおずと手まねきする。反応なし。グラスの縁をナイフの先で二度三度とたたく。反応なし。よそのテーブルを片づけにきた見習いがそばを通りかかるが、呼びとめてことづけをたのもうとしたとき

はもう遅く、行ってしまったあと。こうなったら、やつが戻ってきたときに足をひっかけて転ばせようか。それとも、テーブルクロスをひっぱがすか、灰皿の中のマッチ箱に火をつけるかして、注意をひこうか。それともゴリラのゴムマスクでもかぶったら、連中気がつくだろうか。いや、一番いいのは、だまって席を立ち、勘定を払わずに外へ出ていきかけるという方法だ。これまでわたしがこの手を使ったときには、例外なく店内の給仕全員の注意を一身に集めることができたばかりか、経営者やロビーにいた私服刑事までが駆けつけてきた。

デパートの中でも、わたしの姿はまったく見えない。こっちはカウンターの前をうろうろするばかり。ほかのお客の肩ごしにむこうをのぞき、ときどき小声で、「あの、ちょっと」とか、「ねえ、きみ」とか呼びかけて、女店員の注意をひこうとする。わたしの買物は、その朝家内がよこした見本切れにマッチする縫糸の一巻きだけなのだが、あいにくその日は年一回の縫糸大売出しにあたっていて、カウンターの前では、格安の縫糸を手に入れようという執念に燃えたカミさんたちが、肱で押しのけっこをしている。水車のようにふりまわされる腕の下をかいくぐって、わたしはカウンターの最前列へ首を出し、だれか応対をしてくれる店員はいないかと、あたりを見まわす。むこうの端に手のすいていそうな女店員が一人いるが、わたしがやっとこさそこまでたどりつくあいだに、彼女はさっきわたしのいたほうへ去ってしまう。こうなったら、しんぼう強く待つしかない。ようやく、さしもの混雑も潮の引くようにおさまり、こっちはそれまでしっかり手の中に握りしめていた見本切れをさしだす。女店員はわたしの肩ごしに壁の時計を見やり、エンピツを耳にはさみ、注文控え帳をぱたんと閉じる。

「すみません」彼女はこっちの顔に目もくれずにいう。「五時で閉店です」

わたしをファントムと呼んでほしい。ドアマンはわたしが近づくと身ぶるいしてあらぬ方を眺め、ベルボーイたちはわたしを避けて身を隠す。わたしの体はホテルの予約係の目の前で、みるみるうちに溶けてしまう。球場のホットドッグの売子さえ、手を振っているわたしを焦点の合わぬ目つきで眺め、わたしをさしおいて、すぐ後列にすわったお客に品物を投げてよこす。空港の手荷物受取り所でいちばん最後になるのも、きまってわたしである。ほかの乗客はめいめい自分のスーツケースを受けとって、さっさと出てゆくが、こっちはみんなが帰ったあとにたったひとり居残り、わたしのカバンはきみがさっきからけつまずいてばかりいるその小さな黒いやつだと、声をからして係員に説明しなくてはならない。やっと手にしたその荷物は、自分で外まで運ぶことにしている。もし赤帽を呼んだりしようものなら、わたしは跡形もなく消えうせてしまうだろう。

なによりもまずいのは、わたしの声もやはり人に聞こえないことだ。ふだんはかなり声量のある低音の持ちぬしなのだが、会社のエレベーターで自分の降りる階を知らせようとすると、まるでかぼそいキイキイ声しか出てこない。そこで照れ臭そうに咳ばらいしてから、もう一度「七階！」とつぶやくのとちょうど同時に、前にいた大男が「六階！」とどなる。三度目の試みはエレベーターのドアの閉まる音と偶然いっしょになって聞きとれないし、もうそれ以上の努力はやったとしてもむだだ。すでにエレベーターは七階を通過しており、二十階まできてやっとストップするからである。昇降係はわたしをふりかえって、けげんな顔をする。

「ここが終点？」と、わたしはたずねる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com